

令和8年度病虫害発生予報第5号の発表について

このことについて、次のとおり発表したので送付します。

《予報の概要》

作物名	病虫害名	予想発生量	作物名	病虫害名	予想発生量
水 稲	葉いもち（普通期栽培）	やや少	露地 キュウリ	べと病	やや少
	穂いもち			炭疽病	並
	（早・短期栽培）	やや少		褐斑病	やや少
	（普通期栽培）	やや少		うどんこ病	やや少
	紋枯病（早・短期栽培）	やや少		斑点細菌病	少
	（普通期栽培）	並		モザイク病	やや少
	もみ枯細菌病	並		ミナミキイロアザミウマ	やや少
	ごま葉枯病	並		アザミウマ類	並
	セジロウンカ	並		アブラムシ類	並
	トビイロウンカ	並		ハダニ類	やや少
	ツマグロヨコバイ	並	青ネギ	疫病	やや少
	コブノメイガ			軟腐病	並
	（普通期栽培）	やや少		ネギハモグリバエ	並
カンキツ	斑点米カメムシ類	やや多		ネギアザミウマ	やや多
	そうか病	やや少		ネギコガ	やや多
	黒点病	やや多	アスパラ ガス	褐斑病	並
	ミカンハダニ	並		ネギアザミウマ	やや多
	ミカンサビダニ	やや多		アブラムシ類	やや少
モ モ	ミカンハモグリガ	並		ハダニ類	やや多
	せん孔細菌病	やや多	イチゴ	炭疽病	並
	ハダニ類	並		うどんこ病	やや多
カ キ	ナシヒメシンクイ	並		アブラムシ類	並
	炭疽病	並		ハダニ類	並
	うどんこ病	並	露地キク	白さび病	やや少
	カキノヘタムシガ	やや少		アブラムシ類	やや多
ブ ド ウ	フジコナカイガラムシ	並		ハダニ類	並
	べと病	やや少		アザミウマ類	並
果樹の 共通害虫	カメムシ類	やや少	野菜・花 きの共通 害虫	シロイチモジヨトウ	並
	吸蛾類	並		タバコガ類	並

太文字の病虫害：向こう1か月の間、発生状況に特に注意を要する病虫害を示す。

* 予報根拠中の記号 （+）：発生量を多くする要因 （-）：発生量を少なくする要因
（±）：発生量が平年並になる要因

令和8年度 病虫害発生予報 第5号（8月）

A. 水稻の病虫害

1. 葉いもち（普通期栽培）

予 想 発生地域： 県内全域

発生量： やや少

根 拠 (1) 県予察圃場での発生は認められなかった。（－）

(2) 7月下旬の発生量は少なかった。（－）

(3) B L A S T A M（いもち病発生予察システム）による7月の感染好適日の出現回数は平年並であった。（±）

(4) 8月の気象は気温が平年より高く（－）、降水量がほぼ平年並（±）の予報である。

対 策 (1) いもち病対象の育苗箱施薬を行っていない圃場で発生を認めた場合は、早急に薬剤防除を行う。

(2) 育苗箱施薬を行っている圃場において、上位2葉への進展を認めた場合は早急に薬剤防除を行う。

2. 穂いもち

予 想 発生地域： 県内全域

発生量： 早・短期栽培： やや少

普通期栽培： やや少

根 拠 (1) 県予察圃場での葉いもちの発生は認められなかった。（－）

(2) 7月上中旬の早・短期栽培での葉いもちの発生量は平年並であった。（±）

(3) 8月の普通期栽培での葉いもちの発生量はやや少と予想される。（－）

(4) 8月の気象は気温が平年より高く（－）、降水量がほぼ平年並（±）の予報である。

対 策 止葉に病斑を認めた場合は、液剤や粉剤等では出穂直前に、粒剤では出穂10日前ごろに必ず薬剤防除を行う。

3. 紋枯病

予 想 発生地域： 県内全域

発生量： 早・短期栽培： やや少

普通期栽培： 並

根 拠 (1) 7月下旬の発生は早・短期栽培ではやや少なく（－）普通期栽培では認められなかった（－）が、いずれも一部地域で発生がやや多かった。（＋）

(2) 8月の気象は気温が平年より高く（＋）、降水量がほぼ平年並（±）の予報である。

対 策 (1) 出穂20日前の病株率が10%～20%以上の圃場では薬剤防除を行う。

(2) 発生が多い圃場では、出穂期頃までに確認防除を行う。

4. もみ枯細菌病

予 想 発生地域： 県内全域

発生量： 並

根 拠 (1) 普通期栽培の育苗期での発生は認められなかった。（－）

(2) 8月の気象は気温が平年より高く（＋）、降水量がほぼ平年並（±）の予報である。

対 策 出穂期が高温で降雨を伴うと多発するので、このような天候が予想される

場合は、出穂期に穂いもち防除を兼ねて薬剤散布を徹底する。

5. ごま葉枯病

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： 並

根 拠 (1) 7月下旬の発生は早・短期栽培では認められず（－）、普通期栽培で平年と同様に認められなかった。（±）
(2) 8月の気象は気温が平年より高く（＋）、降水量がほぼ平年並（±）の予報である。

対 策 肥料切れにより多発しやすいため、穂肥を適切に施用する。

6. セジロウンカ

予 想 発生地域： 県内全域
発生時期： やや遅
発生量： 並

根 拠 (1) 県予察圃場での発生量はやや多かった。（＋）
(2) 7月下旬の発生は早・短期栽培では平年並で（±）、普通期栽培ではやや少なかった。（－）
(3) 県予察灯での誘殺数はやや少なかった。（－）

対 策 (1) 育苗箱施薬剤によっては、残効期間に違いがあるため、払い落とし調査を行い、幼虫が10株当たり300頭を超えている圃場では防除する。
(2) ヒメトビウンカの発生状況にも注意し、発生量に応じて本田での薬剤防除を行う。

7. トビイロウンカ

予 想 発生地域： 県内全域
発生時期： 並
発生量： 並

根 拠 (1) 県予察圃場では平年と同様に発生は認められなかった。（±）
(2) 7月下旬の発生は早・短期栽培および普通期栽培で平年と同様に認められなかった。（±）
(3) 県予察灯での誘殺は平年と同様に認められなかった。（±）
(4) 8月の気象は気温が平年より高く（＋）、降水量がほぼ平年並（±）の予報である。

対 策 8月中下旬に普通期栽培では50株調査して1株当たり2～5頭、短期栽培では25株調査して10頭以上の成・幼虫を認めた圃場は防除する。

8. ツマグロヨコバイ

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： 並

根 拠 (1) 県予察圃場での発生量はやや多かった。（＋）
(2) 7月下旬の発生量は早・短期栽培および普通期栽培ともにやや少なかった。（－）
(3) 県予察灯での誘殺数は少なかった。（－）
(4) 8月の気象は気温が平年より高く（＋）、降水量がほぼ平年並（±）の予報である。

対 策 出穂期以降の密度増加によってすす症状の現れる圃場もあるため、本田での薬剤防除を行う。

9. コブノメイガ（普通期栽培）

予 想 発生地域： 県内全域

発生量： やや少

根 拠 (1) 7月下旬の発生は早・短期栽培および普通期栽培ともに認められなかった。（－）

(2) 県予察灯での誘殺数は平年と同様に認められなかった。（±）

(3) 8月の気象は気温が平年より高く（＋）、降水量がほぼ平年並（±）の予報である。

対 策 (1) 周辺の圃場よりも葉色が濃かった圃場では産卵量が増える場合があるので注意する。

(2) 8月上旬の被害株率が20%以上の圃場では、若齢幼虫発生最盛期である8月5～25日頃に薬剤防除を行う。

10. 斑点米カメムシ類

予 想 発生地域： 県内全域

発生量： **やや多**

根 拠 (1) 7月下旬の早・短期栽培での発生量は畦畔、本田ともに平年並（±）であったが、大型カメムシ類はやや多かった（＋）。また、一部地域では発生が多かった（＋）。7月上中旬の普通期栽培の畦畔での発生量は少なかった。（－）

(2) 県予察灯での誘殺数は、大型カメムシ類で平年並（±）、小型カメムシ類でやや少なかった。（－）

(3) 防除員報告では発生量がやや多い地区があった。（＋）

(4) 8月の気象は気温が平年より高く（＋）、降水量がほぼ平年並（±）の予報である。

対 策 (1) 出穂10日前までに畦畔等圃場周辺の除草を行う。また、休耕地はカメムシ類の繁殖場所になるので、耕起等によって雑草の少ない状態を保つ。

(2) 薬剤防除の時期は、液剤や粉剤等の場合は穂揃期頃とその7～10日後である。また、粒剤の場合は5日程度早めて処理する。なお、穂揃期以降にミナミアオカメムシ及びイネカメムシが水稻で繁殖している場合は、粒剤よりも速効的で効果が高いとされる液剤や粉剤の使用が望ましい。

(3) 防除効果を高めるために、地域一斉防除に努める。

B. 果樹の病害虫

－カンキツ－

1. そうか病

予 想 発生地域： 県内全域

発生量： やや少

根 拠 (1) 県予察圃場での7月下旬の発生量は平年並であった。（±）

(2) 一般圃場での7月中旬の発生は平年と同様に認められなかった。（±）

(3) 8月の気象は降水量がほぼ平年並の予報である。（±）

対 策 (1) 発病した夏梢、葉、果実は早めに切除し、圃場外に持ち出すなど適切に処分する。

(2) 樹勢を健全に保ち、防風対策を行う。

2. 黒点病

予 想 発生地域： 県内全域

発生量： **やや多**

根 拠 (1) 県予察圃場での7月下旬の発生量はやや多かった。（＋）

- (2) 一般圃場での7月中旬の発生は平年並であった。(±)
- (3) 8月の気象は降水量がほぼ平年並の予報である。(±)
- 対 策 (1) 伝染源である枯枝は切除し、圃場外に持ち出すなど適切に処分する。
- (2) 薬剤散布は、前回の散布から1か月以内または累積降水量250～300mmを目安に行う。

3. ミカンハダニ

- 予 想 発生地域： 県内全域
発生量： 並
- 根 拠 (1) 県予察圃場での7月下旬の発生量は平年並であった。(±)
- (2) 一般圃場での7月中旬の発生量は平年並であった。(±)
- (3) 8月の気象は降水量がほぼ平年並の予報である。(±)
- 対 策 (1) 発生状況に注意し、1葉当たりの寄生雌虫数が0.5～1頭または寄生葉率が30～40%になれば薬剤防除を行う。
- (2) 薬剤抵抗性の発達を回避するため、同一系統薬剤の使用は年1回とする。

4. ミカンサビダニ

- 予 想 発生地域： 県内全域
発生量： **やや多**
- 根 拠 (1) 県予察圃場での7月下旬の発生は平年と同様に認められなかった。(±)
- (2) 一般圃場での7月中旬の発生量は多かった。(＋)
- (3) 8月の気象は気温が高い予報であり(＋)、降水量がほぼ平年並(±)の予報である。
- 対 策 過去に発生の多かった圃場では、8月上～中旬に薬剤防除を実施する。

5. ミカンハモグリガ

- 予 想 発生地域： 県内全域
発生量： 並
- 根 拠 (1) 県予察圃場での7月下旬の発生量は平年並であった(±)
- (2) 一般圃場での7月中旬の発生量はやや少なかった。(－)
- 対 策 夏芽の発生が多い圃場では、新梢伸長期に防除する。

一モ モー

1. せん孔細菌病

- 予 想 発生地域： 県内全域
発生量： **やや多**
- 根 拠 (1) 県予察圃場での7月下旬の発生量は平年並であった。(±)
- (2) 一般圃場での7月中旬の発生量はやや多かった。(＋)
- (3) 防除員報告では発生の多い地区があった。(＋)
- (4) 8月の気象は降水量がほぼ平年並の予報である。(±)
- 対 策 (1) 発病枝は伝染源となるので、見つけしだい除去し処分する。
- (2) 病原菌は葉や果実の気孔、水孔等や傷口から侵入するので、風当たりが強い圃場では防風ネット等の防風対策を実施する。

2. ハダニ類

- 予 想 発生地域： 県内全域
発生量： 並
- 根 拠 (1) 県予察圃場での7月下旬の発生は認められなかった。(－)
- (2) 一般圃場での7月中旬の発生量は平年並であった。(±)

- (3) 8月の気象は降水量がほぼ平年並の予報である。(±)
- 対 策 (1) 発生の多い圃場では、収穫後の薬剤防除を徹底する。
- (2) 抵抗性の発達回避のため、同一系統薬剤の使用は年1回までとする。

3. ナシヒメシンクイ

- 予 想 発生地域： 県内全域
発生量： 並
- 根 拠 (1) 県予察圃場での7月下旬の芯折れは少なかった。(－)
- (2) 県予察圃場フェロモントラップでの7月の誘殺数はやや少なかった。(－)
- (3) 一般圃場での7月中旬の芯折れの発生量はやや多かった。(＋)
- 対 策 収穫後も薬剤防除を実施する。

－カ キー

1. 炭疽病

- 予 想 発生地域： 県内全域
発生量： 並
- 根 拠 (1) 一般圃場での7月中旬の発生量は平年並であった。(±)
- (2) 8月の気象は降水量がほぼ平年並の予報である。(±)
- 対 策 (1) 圃場内をよく観察して、発病果実や発病枝は見つけしだい除去し、圃場外に持ち出し適切に処分する。特に前年多発生した圃場では注意する。
- (2) 薬剤防除はかけむらのないよう丁寧に散布する。
- (3) 連続した降雨や台風があると発病が急激に進む場合があるので、これらの天候が予想される場合は予防的に薬剤防除を実施する。
- (4) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

2. うどんこ病

- 予 想 発生地域： 県内全域
発生量： 並
- 根 拠 (1) 県予察圃場での7月下旬の発生量は多かった。(＋)
- (2) 一般圃場での7月中旬の発生量はやや少なかった。(－)
- (3) 8月の気象は気温が高い予報である。(－)
- 対 策 (1) 発生量が多くなると防除効果が劣るので早めに薬剤防除を実施する。
- (2) 落葉した葉はできるだけ早く処分する。

3. カキノヘタムシガ

- 予 想 発生地域： 県内全域
発生量： やや少
- 根 拠 (1) 県予察圃場での第1世代成虫の発生は認められなかった。(－)
- (2) 県予察圃場での7月下旬の発生量は平年並であった。(±)
- (3) 一般圃場での7月中旬の発生は認められなかった。(－)
- 対 策 (1) 第1世代成虫最盛期の7～10日後までに防除していない圃場では、早急に薬剤防除を実施する。
- (2) 防除を実施したにもかかわらず、被害が続く場合には追加防除を実施する。

4. フジコナカイガラムシ

- 予 想 発生地域： 県内全域
発生量： 並

- 根 拠 (1) 一般圃場での7月中旬の発生は認められなかった。(－)
 (2) 8月の気象は気温が高い予報である。(＋)
- 対 策 (1) 発生が多い圃場では8月の防除を徹底する。
 (2) 果実とヘタの隙間に生息しているので、薬剤散布は丁寧に行う。特に、スピードスプレーヤー(SS)による防除では、かけむらができないように走行経路を見直すなど注意する。

ーブドウー

1. ベと病

- 予 想 発生地域： 県内全域
 発生量： やや少
- 根 拠 (1) 一般圃場での7月中旬の発生量はやや少なかった。(－)
 (2) 8月の気象は降水量が平年並の予報である。(±)
- 対 策 (1) 圃場の排水に努める。
 (2) 発生が多い圃場では、収穫後の薬剤防除を徹底する。
 (3) 薬剤防除は降雨の前後に重点をおく。

ー果樹の共通害虫ー

1. カメムシ類

- 予 想 発生地域： 県内全域
 発生時期： やや早い
 発生量： やや少
- 根 拠 (1) 県予察圃場予察灯の誘殺数は平年並であった。(±)
 (2) 綾歌郡綾川町の予察灯の誘殺数は平年並であった。(±)
 (3) カキの一般圃場での7月中旬の発生は認められなかった。(－)
 (4) 当年春のスギ花粉飛散量および前年のスギ雄花着花量はやや少なかったため、エサとなる球果の量はやや少なく、第1世代成虫の発生量はやや少ないと予想される。(－)
- 対 策 (1) スギ・ヒノキの球果量が少ない場合は、餌を求めてカメムシ類の果樹園への飛来時期が早まるおそれがある。発生量が少ないと予想される場合でも、早期から園地内を観察し、飛来や被害果実の有無を確認する。
 (2) 施設栽培の場合は、開放口をネット(4mm目合い)で覆うとカメムシ類の侵入防止対策となる。
 (3) 圃場内をよく観察し、被害果実やカメムシ類の発生が見られる場合は、早急に防除を実施する。特にスギ、ヒノキ等が周辺に多い圃場や、過去に被害が認められた圃場では注意する。
 (4) 多発してからの防除は効果が劣る場合があるので、発生初期の防除を徹底する。
 (5) 成虫は夕方に飛来し夜間加害するので、薬剤散布は夕方に広域かつ一斉に行うと効果的である。
 (6) 黄色蛍光灯は、チャバネアオカメムシには忌避効果があるが、ほかのカメムシ類には効果がないので注意する。
 (7) 防除薬剤は、主要農作物病虫害雑草防除指針、香川県監修の果樹病虫害防除暦を参考にする。

2. 吸蛾類(アカエグリバ、ヒメエグリバ)

- 予 想 発生地域： 県内全域
 発生量： 並
- 根 拠 県予察圃場予察灯の7月の誘殺数は平年並であった。(±)

- 対 策 (1) 熟果及び裂果などを早めに取り除き、適正に処分する。
(2) 被害の多い場合は、夜間の捕殺、網掛け、黄色蛍光灯などで対応する。

C. 野菜、花きの病害虫

ー露地キュウリー

1. ベと病

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： やや少

- 根 拠 (1) 7月下旬の発生量はやや少なかった。(－)
(2) 8月の気象は降水量がほぼ平年並の予報である。(±)

- 対 策 (1) 圃場の排水を良くするとともに、肥料切れに注意し、樹勢が衰えないように栽培管理する。
(2) 耐病性品種を用いる。
(3) 整枝、誘引等を適切に行うとともに、初発時期の葉を除去し、通風を図る。除去した葉は圃場外に持ち出すなど適正に処分する。
(4) 薬剤防除は予防的に実施し、初期感染を防ぐ。
(5) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

2. 炭疽病

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： 並

- 根 拠 (1) 7月下旬の発生量は少なかった。(－)
(2) 防除員報告では、発生量のやや多い地区があった。(＋)
(3) 8月の気象は降水量がほぼ平年並の予報である。(±)

- 対 策 (1) 圃場の排水を良くするとともに、窒素過多にならないよう肥培管理する。
(2) 整枝、誘引等を適切に行うとともに、初発時期の葉を除去し、通風を図る。除去した葉は圃場外に持ち出すなど適正に処分する。
(3) 薬剤防除は予防的に実施し、初期感染を防ぐ。
(4) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

3. 褐斑病

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： やや少

- 根 拠 (1) 7月下旬の発生は認められなかった。(－)
(2) 8月の気象は降水量がほぼ平年並の予報である。(±)
(3) 近年、耐病性品種を用いる地域が増加していることから、発生が少ない。(－)

- 対 策 (1) 圃場の排水を良くするとともに、窒素過多にならないよう肥培管理する。
(2) 耐病性品種を用いる。
(3) 整枝、誘引等を適切に行うとともに、初発時期の葉を除去し、通風を図る。除去した葉は圃場外に持ち出すなど適正に処分する。
(4) 薬剤散布は予防的に行き、初期感染を防ぐ。
(5) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

4. うどんこ病

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： やや少

- 根 拠 (1) 7月下旬の発生量はやや少なかった。(－)
(2) 近年、耐病性品種を用いる地域が増加していることから、発生が少な

い。(一)

- 対 策 (1) 窒素過多にならないよう肥培管理する。
(2) 耐病性品種を用いる。
(3) 整枝、誘引等を適切に行うとともに、初発時期の葉を除去し、通風を図る。除去した葉は圃場外に持ち出すなど適正に処分する。
(4) 薬剤防除は予防的に行い、初期感染を防ぐ。
(5) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

5. 斑点細菌病

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： 少

- 根 拠 (1) 7月下旬の発生は平年と同様に認められなかった。(±)
(2) 8月の気象は降水量がほぼ平年並の予報である。(±)

- 対 策 (1) 圃場の排水を良くするとともに過繁茂にならないよう栽培管理する。
(2) 整枝、誘引等を適切に行うとともに、初発時期の葉を除去し、通風を図る。除去した葉は圃場外に持ち出すなど適正に処分する。
(3) 薬剤防除は予防的に行う。特に曇雨天が続くような場合は注意する。

6. モザイク病

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： やや少

- 根 拠 (1) 7月下旬の発生量は少なかった。(－)
(2) 7月下旬のアブラムシ類の発生量は多かった。(＋)
(3) 黄色水盤での7月のアブラムシ類の誘殺数はやや少なかった。(－)

- 対 策 (1) アブラムシ類の防除を行う。
(2) 発病株は、早期に抜き取り圃場外に持ち出すなど適正に処分する。
(3) 収穫用具の消毒をする。

7. ミナミキイロアザミウマ

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： やや少

- 根 拠 (1) 7月下旬の発生は認められなかった。(－)
(2) 8月の気象は降水量がほぼ平年並の予報である。(±)

- 対 策 (1) 青色粘着トラップ等を利用して発生状況を確認し、発生が多い圃場では防除を行う。
(2) シルバーマルチを敷設する。
(3) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。
(4) 本虫が媒介する黄化えそ病の発生地域では、本虫を対象に定植時に必ず粒剤または灌注処理し、定期的に薬剤防除を実施する。発病株を認められたら早急に地上部を除去し、圃場外に持ち出すなど適正に処分する。
(5) 施設栽培からの飛び出しを防ぐため、発生を確認した施設では、栽培終了後、施設を密閉して死滅させる。
(6) 防除後も表土中の蛹や葉肉内の卵が新たに羽化、孵化する場合もあるので、多発圃場では7～10日間隔で防除を行う。
(7) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

8. アザミウマ類（ネギアザミウマ、ミカンキイロアザミウマ）

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： 並

- 根 拠 (1) 7月下旬の発生量は平年並であった。(±)
 (2) 8月の気象は降水量がほぼ平年並の予報である。(±)
- 対 策 (1) 青色粘着トラップ等を利用して発生状況を確認し、発生が多い圃場では防除を行う。
 (2) シルバーマルチを敷設する。
 (3) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。
 (4) 防除後も表土中の蛹や葉肉内の卵が新たに羽化、孵化する場合もあるので、多発圃場では7～10日間隔で防除を行う。
 (5) 抵抗性発達回避のため、同一系統薬剤を連用しない。

9. アブラムシ類

- 予 想 発生地域： 県内全域
 発生量： 並
- 根 拠 (1) 7月下旬の発生量は多かった。(＋)
 (2) 黄色水盤での7月のアブラムシ類の誘殺数はやや少なかった。(－)
 (3) 8月の気象は降水量がほぼ平年並の予報である。(±)
- 対 策 (1) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。
 (2) 抵抗性の発達回避のため、同一系統薬剤を連用しない。
 (3) 8月中旬から有翅虫の飛来が増加する場合があるので、病虫害防除所ホームページに掲載している黄色水盤トラップによる誘殺数を参考にして適期防除に努める。

10. ハダニ類

- 予 想 発生地域： 県内全域
 発生量： やや少
- 根 拠 (1) 7月下旬の発生量は少なかった。(－)
 (2) 8月の気象は降水量がほぼ平年並の予報である。(±)
- 対 策 (1) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。
 (2) 刈り取った茎葉は圃場から持ち出し、処分する。
 (3) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

－青ネギー

1. 疫病

- 予 想 発生地域： 県内全域
 発生量： やや少
- 根 拠 (1) 7月下旬の発生は認められなかった。(－)
 (2) 8月の気象は降水量がほぼ平年並の予報である。(±)
- 対 策 (1) 圃場の排水を良くし、水を長期間停滞させないようにする。
 (2) 発生の多い圃場では、菌密度が高くなっているので、圃場をかえるか土壌消毒を実施する。
 (3) 薬剤防除は予防的に7～10日間隔で行う。

2. 軟腐病

- 予 想 発生地域： 県内全域
 発生量： 並
- 根 拠 (1) 7月下旬の発生は認められなかった。(－)
 (2) 8月の気象は気温が高く(＋)、降水量がほぼ平年並(±)の予報である。
- 対 策 (1) 窒素質肥料の過不足がないよう肥培管理する。

- (2) 圃場の排水を良くし、水を長期間停滞させないようにする。
- (3) 発生の多い圃場では、菌密度が高くなっているので、圃場をかえるか土壌消毒を実施する。
- (4) 薬剤防除は予防的に7～10日間隔で行う。

3. ネギハモグリバエ

- 予 想 発生地域： 県内全域
発生量 : 並
- 根 拠 (1) 7月下旬の発生量は平年並であった。(±)
(2) 8月の気象は降水量がほぼ平年並の予報である。(±)
- 対 策 (1) 育苗床では防虫ネットを張るなどして、侵入防止対策を講じる。
(2) 摘葉した残さや、収穫終了後の茎葉は次作の発生源になるので、土中に埋めるか、古ビニール等で被覆するなど、適正に処分する。
(3) 多発してから防除は困難であるので、産卵痕や食害痕が見え始めたら早めに防除する。
(4) 定植時には育苗トレイ灌注または粒剤施用をする。

4. ネギアザミウマ

- 予 想 発生地域： 県内全域
発生量 : **やや多**
- 根 拠 (1) 7月下旬の発生量はやや多かった。(＋)
(2) 8月の気象は降水量がほぼ平年並の予報である。(±)
- 対 策 (1) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。
(2) ネギアザミウマの食害痕から病原菌が侵入する場合があるので、葉に食害が認められる場合は早期に防除を行う。
(3) 令和3年度に実施した薬剤感受性検定では、シペルメトリン乳剤（IRACコード：3A）、スピノサド水和剤（IRACコード：5）および一部のネオニコチノイド系薬剤（IRACコード：4A）等で感受性が低い個体群が存在したことから、防除で効果が見られない場合は同系統薬剤の使用を控える。
(4) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

5. ネギコガ

- 予 想 発生地域： 県内全域
発生量 : **やや多**
- 根 拠 (1) 7月下旬の発生量は多かった。(＋)
(2) 8月の気象は降水量がほぼ平年並の予報である。(±)
- 対 策 (1) 摘葉した残さや、収穫終了後の茎葉は次作の発生源になるので、土中に埋めるか、古ビニール等で被覆するなど、適切に処分する。
(2) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。
(3) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

ーアスパラガスー

1. 褐斑病

- 予 想 発生地域： 県内全域
発生量 : 並
- 根 拠 (1) 7月下旬の発生は認められなかった。(－)
(2) 防除員報告では、発生量のやや多い地区があった。(＋)
(3) 8月の気象は降水量がほぼ平年並の予報である。(±)

- 対 策 (1) 過繁茂にならないよう、茎葉の刈込みや適切な肥培管理を行う。
 (2) 刈り取った被害茎葉は圃場外に持ち出すなど適正に処分する。
 (3) 令和7年度に実施した薬剤感受性検定では、アゾキストロビン水和剤 (FRAC コード：11) に対して感受性が低い菌株が確認されているので注意する。
 (4) 耐性菌の発生を回避するため、同一系統の薬剤を連用しない。
 (5) 発生前から予防的に薬剤散布を行う。

2. ネギアザミウマ

予 想 発生地域： 県内全域
 発生量： **やや多**

- 根 拠 (1) 7月下旬の発生量はやや多かった。(+)
 (2) 8月の気象は降水量がほぼ平年並の予報である。(±)
- 対 策 (1) 施設の開口部を防虫ネットで被覆したり、光反射資材を施設周縁部に敷設したりするなどして、侵入防止対策を講じる。
 (2) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。
 (3) 圃場内の数か所で成茎の擬葉が繁茂しているところを手で払って、10×20cm程の板上に1か所当たり1～5頭の成虫を認めたら防除する。
 (4) 令和3年度に実施した薬剤感受性検定では、シペルメトリン乳剤 (IRAC コード：3A)、スピノサド水和剤 (IRAC コード：5) および一部のネオニコチノイド系薬剤 (IRAC コード：4A) 等で感受性が低い個体群が存在したことから、防除で効果が見られない場合は同系統薬剤の使用を控える。
 (5) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

3. アブラムシ類

予 想 発生地域： 県内全域
 発生量： **やや少**

- 根 拠 (1) 7月下旬の発生は平年と同様に認められなかった。(±)
 (2) 黄色水盤での7月のアブラムシ類の誘殺数はやや少なかった。(－)
 (3) 8月の気象は降水量がほぼ平年並の予報である。(±)
- 対 策 (1) 施設の開口部を防虫ネットで被覆したり、光反射資材を施設周縁部に敷設するなどして、侵入防止対策を講じる。
 (2) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。
 (3) 抵抗性の発達回避のため、同一系統薬剤を連用しない。
 (4) 8月中旬から有翅虫の飛来が増加する場合があるので、病虫害防除所ホームページに掲載している黄色水盤トラップによる誘殺数を参考にして適期防除に努める。

4. ハダニ類

予 想 発生地域： 県内全域
 発生量： **やや多**

- 根 拠 7月下旬の発生量はやや多かった。(+)

対 策 (1) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。
 (2) 刈り取った茎葉は圃場から持ち出し、処分する。
 (3) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

ーイチゴ（育苗床）ー

1. 炭疽病

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： 並

根 拠 (1) 7月下旬の育苗床での発生量は平年並であった。（±）
(2) 8月の気象は気温が高い予報である。（+）

対 策 (1) 発病葉やランナーは可能な限り除去するとともに除去した発病葉、ランナーは伝染源となるので適正に処分する。
(2) 水滴の飛散等で伝染するので、発病が見られる圃場では、灌水の跳ね返りがないように注意する。
(3) ランナーの切り離し前までの防除を徹底し、育苗中に伝染環を断つ。
(4) 薬剤防除は予防的に行い、初期感染を防ぐ。
(5) MBC殺菌剤（FRACコード：1）、N-フェニルカーバメート類（FRACコード：10）、QoI殺菌剤（FRACコード：11）、PP殺菌剤（FRACコード：12）に対して感受性の低い菌株が確認されているので注意する。

2. うどんこ病

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： **やや多**

根 拠 7月下旬の育苗床での発生量はやや多かった。（+）

対 策 (1) ランナーの切り離し前までの防除を徹底し、育苗床で発病を減らすよう努める。
(2) 発生圃場では、7日より短い間隔で薬剤防除を行う。
(3) 収穫を終了した圃場（本圃）の株は直ちに処分するとともに、子苗（ランナー）を切り離した後、親株は早期に除去し処分する。
(4) 窒素肥料の過多や葉が混み合ったりすると多発しやすくなるので、適切な栽培管理を行う。
(5) 耐性菌の発生を回避するため、同一系統の薬剤を連用しない。散布回数が多くなることから、各薬剤の使用回数及び収穫前日数を遵守する。

3. アブラムシ類

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： 並

根 拠 (1) 7月下旬の発生量は平年並であった。（±）
(2) 綾歌郡綾川町の黄色水盤での7月のアブラムシ類の誘殺数は、やや少なかった。（-）
(3) 8月の気象は降水量がほぼ平年並の予報である。（±）

対 策 (1) 育苗床は防虫ネットで被覆し、アブラムシ類の飛び込みを防止する。
(2) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。
(3) 抵抗性の発達回避のため、同一系統薬剤を連用しない。
(4) 8月中旬から有翅虫の飛来が増加する場合があるので、病虫害防除所ホームページに掲載している黄色水盤トラップによる誘殺数を参考にして適期防除に努める。

4. ハダニ類

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： 並

根 拠 7月下旬の発生量は平年並であった。（±）

対 策 (1) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。

- (2) 親株床での防除を徹底し、育苗床での防除回数を減らすよう努める。
- (3) 育苗床（苗の親株からの切除後）では発生をこまめに観察し、早めに防除を実施する。散布にあたっては、使用回数に留意する。

ー露地キクー

1. 白さび病

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： やや少

根 拠 (1) 7月下旬の発生量は小ギクではやや少なく（－）、輪ギクでは認められなかった（－）。

(2) 8月の気象は気温が高く（－）、降水量がほぼ平年並（±）の予報である。

- 対 策 (1) 薬剤散布は発生初期から5～7日間隔で行う。
(2) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。
(3) 採穂前の防除を徹底し、本圃に病気を持ち込まないようにする。
(4) 肥料は適切に施用し、窒素過多にならないように注意する。

2. アブラムシ類

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： **やや多**

根 拠 (1) 7月下旬の発生量は小ギク、輪ギクともに多かった。（＋）

(2) 綾歌郡綾川町の黄色水盤での7月のアブラムシ類の誘殺数は、やや少なかった。（－）

(3) 8月の気象は降水量がほぼ平年並の予報である。（±）

- 対 策 (1) 今後作付けを行う場合は、光反射資材や防虫ネットを張るなどして、侵入防止対策を講じる。
(2) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。
(3) 育苗期から生育初期に粒剤等を施用する。
(4) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。
(5) 8月中旬から有翅虫の飛来が増加する場合があるので、病虫害防除所ホームページに掲載している黄色水盤トラップによる誘殺数を参考にして適期防除に努める。

3. ハダニ類

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： 並

根 拠 (1) 7月下旬の発生量は、小ギクでは認められず（－）、輪ギクでは多かった（＋）。

(2) 8月の気象は降水量がほぼ平年並の予報である。（±）

- 対 策 (1) 人による持ち込みを回避するため、発生圃場に入った着衣のまま未発生圃場に立ち入らない。
(2) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。
(3) 発生が局所的な場合には、スポット散布を行う。
(4) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

4. アザミウマ類

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： 並

根 拠 (1) 7月下旬の発生量は小ギクでは平年並（±）、輪ギクではやや多かった（＋）。

- (2) 8月の気象は降水量がほぼ平年並の予報である。(±)
- 対 策 (1) アザミウマの吸汁により、ウイルス病が媒介される場合や食害痕から病原菌が侵入する場合があるので、食害が認められる場合は早期に防除を行う。
- (2) 防除後も表土中の蛹や葉肉内の卵が新たに羽化、孵化する場合もあるので、多発圃場では7～10日間隔で防除を行う。
- (3) シルバーマルチ等を被覆することで飛び込み量を減らすことができる。
- (4) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。
- (5) 抵抗性発達回避のため、同一系統薬剤を連用しない。

－野菜・花きの共通害虫－

1. シロイチモジヨトウ

(令和8年7月8日付け病害虫発生予察注意報第4号発表)

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： 並

- 根 拠 (1) 7月下旬のネギでの発生量は平年並であった。(±)
- (2) 綾歌郡綾川町のフェロモントラップでの誘殺数は、平年並であった。(±)
- (3) 8月の気象は降水量がほぼ平年並の予報である。(±)

- 対 策 (1) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。
- (2) 中老齢幼虫には薬剤の効果が劣るので、初期の食害発生に注意し、体長1cm以下の若齢幼虫期に薬剤防除を行う。
- (3) 令和6年度に実施した薬剤感受性検定では、ジアミド系薬剤(IRACコード：28)に対する感受性が低くなった個体群が存在したことから、防除で効果が見られない場合は同系統薬剤の使用を控える。
- (4) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

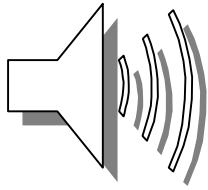
2. タバコガ類(タバコガ、オオタバコガ)

(令和8年6月5日付け病害虫発生予察注意報第3号発表)

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： 並

- 根 拠 (1) 7月下旬の発生量はキュウリではやや少なく(－)、小ギクでは発生は認められず(－)、輪ギクではやや少なかった(－)。
- (2) 防除員報告では、丸亀市飯山町のフェロモントラップでのオオタバコガの誘殺数は平年並であった。(±)
- (3) 綾歌郡綾川町のフェロモントラップでの誘殺数は、タバコガ、オオタバコガともにやや多かった。(＋)
- (4) 8月の気象は降水量がほぼ平年並の予報である。(±)

- 対 策 (1) 施設の出入口やサイド換気口等の開口部に防虫ネットを張り、侵入を防止する。
- (2) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。
- (3) 花蕾や生長点を食害するので、被害が見られたら直ちに薬剤防除を行う。
- (4) 老齢幼虫に対しては薬剤の効果が低いので、早期発見に努め、防除効果の高い若齢幼虫期に薬剤散布を行う。
- (5) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。



6月～8月は、農薬危害防止運動月間です。

農薬の使用が増える時期ですので、今一度、農薬を適正に使用できているか、チェックしましょう。

農薬はラベルをよく読んで使用しましょう

病虫害防除所インターネットホームページ

URL: <https://www.pref.kagawa.lg.jp/byogaichuboj/index.html>

